

● 国語科 ●

# 一人一人の読解力を育む ノート・ワークシート指導、 板書のあり方の研究

静岡県 静岡市立東豊田小学校（校長 藤巻哲男）

- ① 「つかむ・もつ→深める・広げる→まとめる」という授業過程を意識して、ノート・ワークシートを活用する。
- ② 付けたい力を明確にしたワークシート、三角ロジックを導入したワークシート、子どもの思考の筋道を補助するワークシート等の工夫によって読みを深める。
- ③ 小中合同研修の場を通じて、ノート・ワークシート指導について深める。
- ④ 子どもの学びの筋を可視化する板書を目指す。

## はじめに

本校は、静岡市の中部、有度山丘陵西斜面の末端部に位置している。そのため、背後に豊かな自然を有するとともに、県営運動施設、市営動物園、県立図書館や美術館、大学等の公共施設も多く、文化的にも恵まれた地域である。

交通環境としては、学区内をJR・国道・東名高速道路、静岡地区と清水地区をつなぐ南幹線道路や国道と東名を結ぶSBS通り等、主要な交通路が通過している。

このような好立地条件のため、急速に住宅化が進んだ。明治7年から歴史のひも解ける本校は、長い間、住民の学校に寄せる関心も高く協力的であったが、近年は家庭状況が多様化し、保護者の学校に対する関心も以前とは変わりつつある。

## I 研究の概要

### 1. 研究主題設定の理由

本校は、ここ数年、「子ども同士の対話による学び合いの学習」を大切にし、「伝え合い、考えを深めるための手だての工夫」を研究してきた。その成果としては、自分の意見をもって友達に伝える子が少しずつ増えてきたこと、個の意見に深まりが見られ始めていること、学習の流れの分かるノートを工夫して書ける子が増えつつあることが挙げられる。

しかし、「学び合い」は、「伝え合い」に留まりがちで、積極的な態度で「深め合う」学習にまでは至っていない。そのため、国語科の読解学習においても、一人一人の子どもの主体的な「深い読み取り」の姿を実現することが十分にできていない。

杉崎哲子（静岡大学教育学部教授）は、ノート・ワークシートや板書が子どもの主体的な取り組みを促進し、思考の過程の可視化によって学びを深める効用のあることを明らかにしている<sup>1)ii</sup>。

そこで、杉崎氏を共同研究者・講師として招聘し、国語科教育における主体的な子どもの読解力を育むためには、どんな板書やノート・ワークシート等が効果的なのかを明らかにしようと考えた。

## 2. 研究の方法

- (1) ノート・ワークシートをどの場面でどのように用いるのか、授業の過程を意識して活用する。
- (2) ノート・ワークシートや板書について、以下の内容の研究をする。
  - ① 「言葉」に着目させることを可能にするノート・ワークシートや板書
  - ② 子ども自身が自らの読解学習における学び方や思考・足跡を理解するノート・ワークシートや板書
  - ③ 交流（対話）が個の学びに生き、読解を深めることにつながるノート・ワークシートや板書
- (3) 授業実践を通しての実際的な研究を行う。その際、杉崎哲子教授を共同研究者・講師として招聘する。

## 3. 研究の内容

### (1) 授業過程を意識したノート・ワークシートの活用

これまで、本校では45分の授業過程を3つの段階「つかむ・もつ→深める・広げる→まとめる」として構想し実践してきた。

#### 〈つかむ・もつ段階〉

「つかむ」段階では、本時の学習のめあて・課題や活動内容を子どもと共有する。本時で何を学んでいくのか、学習に見通しをもたせることによって問題意識と意欲を喚起していく。そのために、子どもにとって必然性のある学習課題を設定する。

「もつ」の段階では課題に対する自分の考えをもたせる。思考を言葉や絵、図など自他ともに確認できる形で可視化する時間と場を保障する。自分が何を根拠にしてどう考えたのか、何を伝えたいのか、相手に分かるように工夫することを意識させる。

#### 〈深める・広げる段階〉

「深める・広げる」段階では、考えを友達と伝え合うことを通して自分の考えを深めたり広げたりする。この活動を通してより価値のある気付きや発見を共有し、この学習で付けるべき力が付くようにする。

この段階において、子ども同士が伝え合い、学び合える学習形態（ペアやグループ活動など）を必ず入れるようにする。

#### 〈まとめる段階〉

最後の段階「まとめる」では、本時の学びのまとめと振り返りを子どもと共に、子どもの学びを見届け評価していく。

この3つの段階の中では、まず、〈つかむ・もつ段階〉の「もつ」の段階でノート・ワークシートを用いる場を効果的に設定することで自分の考えの可視化が行われ、その後の「深める・広げる段階」での学び合いにつながるであろうと考えた。

さらに、「深める・広げる段階」で工夫してノート・ワークシートを活用して「思考の見える化・共有化」が進められれば、深い学びに向かうことができるのではないかと構想した。

あわせて、ホワイトボードや付箋を、ノート・ワークシート、板書をより効果的なものに高めるツールとして捉え、その利用の工夫も進めていくことにした。

具体的な活用の様子やその成果等は、この後の研究授業の報告の中で述べる。

## (2) 研究授業 1 :

### 3年「まとまりをとらえて読み、感想を話そう」

[学習材] 『こまを楽しむ』 安藤正樹  
(光村図書3年)

#### [单元の目標]

「初め」「中」「終わり」のまとまりをとらえ、段落ごとに大事な言葉や文に気を付けて読み、感想を伝え合うことができる。

#### ○ 設定した言語活動

本単元では「一番好きなこまを見つけて感想を話そう」という言語活動を設定した。

「こま博士」を目指して、まず、一人一人担当するこまを決め、担当グループごと

に、こまの特徴を読み取る活動を行った。そして、グループで読み取ったことをもとに、他のこまを担当した友達と説明し合うという活動である。

#### ○ こまの特徴を読み取り説明するためのワークシート①

「担当のこまについてグループで話し合い、読み取ったことをもとに説明し合う活動を通して、3つのこまの特徴を書くことができる」という本時の目標に迫るために、次のワークシート①を用意した。

写真と文章とを結び付けながら、それぞれのこまの特徴を読み取れるように、「色がありごま」、「鳴りごま」、「さか立ちごま」の3つの段落の本文と写真、特徴を書き込むための、表を載せたワークシートになっている。

子どもたちは、まず、授業過程における「自分の考えをもつ」段階で、こまの特徴がわかるところを読み取って本文に線を引いた。それから、「深める・広げる」段階で、

名前	特徴	感想
鳴りごま	音を楽しむ	音を楽しむ
さか立ちごま	回す	回す
色がありごま	色を楽しむ	色を楽しむ

◆ ワークシート①

グループ内で互いに確認し合いながら、担当したこまの特徴を表に書き込んでいった。そして、一番伝えたいそのこまの特徴は何かを話し合って決めた。

### ○ ワークシート①の課題

ワークシート①に対して、事後研修では、次の課題が指摘された。

- ・ ワークシートの構成や書くスペース等の大きさが、3年生にとって難しい。もっと単純なものがよい。
- ・ 特徴がわかつっていても、「短い言葉で表す」と指示されたことで書けなくなってしまっていた。
- ・ 「一番伝えたい特徴は何か」と聞かれて、「一番」を選ぶのが難しかったようだ。
- ・ 特徴のまとめ方、書き表し方がわからなかつたようだ。

「このこまは～～なこまです。」等の型を与えることで短くまとめることが容易になるのではないか。

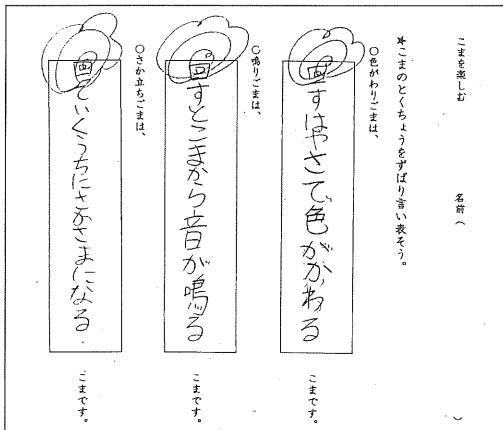
子どもたちのワークシートを見ても、文章に線を引いた部分をそのまま表に書き写しているだけのものが多かった。また、求めている書く内容や量が多いため、自分の担当以外のこまについては、時間内に書ききれない子もいた。

### ○ ワークシート②の工夫

そこで、次時では、「こまの特徴をズバリ言い表そう」という課題を設定し、「○○ごまは、～～な、こまです」と書き込めるワークシート②を用意した。前時で用いたワークシートに比べて、子どもに付けたい力を明確にし、子どもにとつても何をしたらいいのかが分かるシートにしてみた。

その結果、「一番伝えたい特徴は何か」

と教師が問わなくても、次に示す子どものシートのように、読み取った特徴の中で大事だと思うところをその子なりの表現を使って短くまとめて書くことができた。



### ◆ ワークシート②

#### (3) 研究授業2 :

##### 6年「紀行文を読むことで世界を旅行しよう！」

[学習材] 『森へ』 星野道夫（光村図書  
6年）

##### [単元の目標]

教科書教材文『森へ』や他の紀行文を読むことを通して、紀行文の読み方を知る。また、筆者の見方や考え方に対して自分の考えをもち、それを伝え合うことを通して、自分の考えを明確にしたり深めたりすることができます。

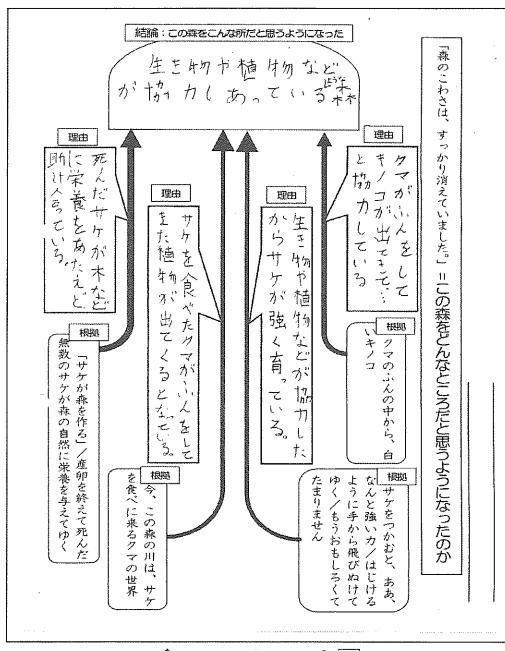
##### ① 思考の手立てとなるワークシートの工夫

##### ○ 三角ロジック・クラゲチャートの導入

子どもの思考を助け、思考スキルを高める思考ツールの一つにクラゲチャートがある。これは主に、結論・主張の根拠を見つけてつなぎ、「理由づける思考」のときに用いられる。このまま用いても有効ではあるが、「根拠」と「主張」の二項だけを書

き入れるのでなく、「理由づけ」の項も加えたチャートに作り変えてみた。つまり、「根拠」と「主張」と「理由づけ」の三項による「三角ロジック」を活用できるチャートにしたのである<sup>iii</sup>。

これを活用すると「根拠」と「主張」とをつなぐ「理由づけ」を明確にする必要性が生じ、また、可視化もされる。その結果、論理的な読解力や思考力が伸びるとともに、他者との検討が容易になると考えたのである。



◆ ワークシート①

例えばA児は、上のワークシート①のように、この三角ロジック・クラゲチャートを用いて、筆者の森に対する見方の変化を読み取っていった。四つの根拠それぞれから一貫性のある明確な理由づけを行い、論理的に矛盾のない総合的な結論を導き出すことができていることが分かる。

## ○ 「段階的」な三角ロジック・クラゲチャートの活用

さらにその次の時間、先述の「三角ロジッ

ク・クラゲチャート」の形を変え、「頭の部分」を三段階に分けたワークシートを用いた。

筆者の森に対する見方をさらに読み進め、前時までの読みと合わせて総合的に判断させることを学習のねらいとした。そこで、読みの段階を次の三段階に設定して、ワークシートを通じて考えを進めさせようと考えたのである。

ア…まず、前時から本時冒頭にかけての四つの箇所に基づく読みの復習。

イ…次に、アの読みと筆者の述べる「倒木の物語」を根拠にした読みを合わせた読み。

ウ…最後に、ア、イの読みと「森はさまざまな物語を聞かせてくれるよう」だ、「森はゆっくりと動いている」という筆者の森に対する思いを表した箇所を根拠にした総合的な読み。

その結果、例えばB児は、このワークシートを用いることで次のように読み深めていくことのできたことが、このシートから読み取れる。

ア…共に助け合いながら作りあげている森。森の自然は美しいが厳しい所。

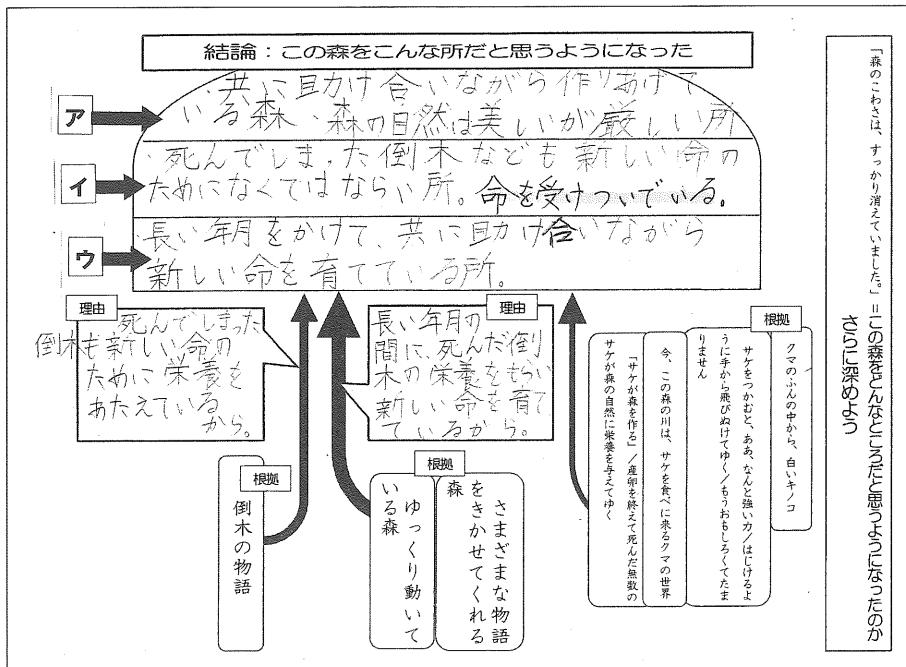


イ…死んでしまった倒木なども新しい命のためになくてはならない所。命を受けついでいる。



ウ…長い年月をかけて、共に助け合いながら新しい命を育てている所。

まず、アでは、単なる「助け合い」と読んでいたものが、イで、「命を受け継いでいる」という読みに深化している。そしてさらに、ウでは、「長い年月」という時間



概念も加わることで、筆者の森に対する捉え方の読みが深まっていることが分かる。

## ② 工夫したワークシートを用いての「深め合う」読みの交流

上記のワークシートを用いることで、どんな読みの交流が行えたのだろうか。ワークシート①を用いた学習場面を見てみたい。ここでは、自分の考えを記述した後、それを修正したり深めたりすることを課題にしたグループ学習を行った。

その結果、例えば3班では、次ページのような交流の様子が見られた。

相互の読みをさかんに参考にしようとしている様子が伺えるとともに、5人中3人の子どもの最終まとめに深まりが見られる。「根拠」「理由」「結論」の「三角ロジック」によって読み取るとともに、それを自他に可視化して表したこと、そのシートを用いて「互いの読みを出し合い、修正したり深

めたりしてよりよい読みにしよう」という課題で交流をしたことが、この深め合いを実現させたと考えてよいだろう。

## ③ ワークシートに赤青ペンで書き込むことを通して

上記の交流の際に、赤や青等のペンを用いて、ワークシートに書き込むというワークシートの活用も行っていた。他者の読みを積極的に聞き取り、自分の読みとの比較検討が促進されるように、「参考にしたいと思った友達の意見」や「修正したい自分の読み」を、交流をしつつ書きませたのである。

3班の交流が進み、個の読解内容に広がりや深まりを見ることのできた要因の一つになっていると言うことができるだろう。

## ④ 板書の活用について

この研究授業2の板書においては、単な

<交流前の読み>		<参考にしたいと思った読み>	<最終的な読み>
C 児	・森はくり返すことができない森を保っている。→すばらしい。	・豊かな自然ができる。 ・協力。 ・厳しい自然。	・森はくり返すことで豊かな自然を保っている。動物が協力しているおかげ。
D 児	・森の自然は美しいが自然界はきびしい。 ・森と動物が一体となって協力し合っている所。 ・ループすることによつて成り立っている。	・それぞれが助け合って豊かな自然ができる。 ・それぞれが力強く生きる。 ・自然是育っていく。 ・生き物が協力し合っている所。 ・おどろき。新しい発見。 ・森はくり返すことで保っている。	・森と自然は美しいが生きぬくのは大変。だから、森と動物が一体となってループし、協力することで成り立っている。
E 児	・皆で助け合って協力していく所。	・美しい。厳しい。 ・新しい発見をする。	・皆が協力し合って助け合っている所
F 児	・動物と自然が協力して暮らす森ループしていく、そのループが森をつくっている。成り立たせている。	・動物と自然が助け合っている。 ・森の自然は美しい。→自然界はきびしい。	・動物と森が協力して助け合って暮らす森。ループしている(サケ→クマ→キノコ)。
G 児	・自然豊かな所。	・森や生き物と協力して豊かな所をつくっている	・森の生き物全体で協力して豊かな森をつくっている。

#### ◆ ワークシートAを用いた「交流」による読解内容の広がり・変容（3班）

る子どもの学習の流れの記録や教師の教えたい内容の提示ではなく、子どもの読解を支えるものになることを目指して取り組んだ。具体的には、互いの読みを可視化できる板書、読解の方法や考えの進め方の「ガイド」「サポート」となる板書を目指した。

その結果については、本研究授業に基づいて書かれた論文から、共同研究者・講師である静岡大学教育学部の杉崎哲子の考察を引用する<sup>iv</sup>。

「この実践での板書は視写させるものではなく、児童が個々に思考ツールに取り組む際に、そこへの『書く』を促す支援の役割を果し、その後も児童が読みを深めていく過程を隨時追うタイミングで確認しながら、思考（読み）の筋を可視化していた。グループ活動後の一斉の場面でも各自のシートや各班のシートを包括しながら有効に機能し、学習者側の『書く』と相互に作用し合って授業が展開されていたと言える

だろう。」

#### (4) 研究授業3： 6年「宮沢賢治に迫る！」

##### [学習材]

『やまなし』宮沢賢治（光村図書6年）

##### [単元の目標]

『やまなし』の特徴的な表現や二つの場面の対比的な描写を読み取ったり、『イーハトーヴの夢』（畠山博）や賢治『やまなし』についての批評文・解説文、また賢治の他作品を読んだりすることを通して、『やまなし』に対する賢治の思いを総合的に判断して捉えることができる。

#### ○ 思考の筋を援助するワークシートの工夫

本単元では、研究授業2を受けて、子どもの思考の筋=読解の方法・考えを一層援助するワークシートを考えてみた。

「やまなし」の主題を読み取ることは、子どもたちにとって容易ではない。「やまなし」のみをテキストとして読んでいてもなかなか考えを明確にすることはできない。

そこで、「イーハトーヴの夢」、賢治の他作品、研究者の論文、そして友達の考えから総合的に考えを導かせよう構想した。そのためのワークシートには、三角ロジックも導入するとともに、自他ともに考えが「見える」ものになるように心掛けた。

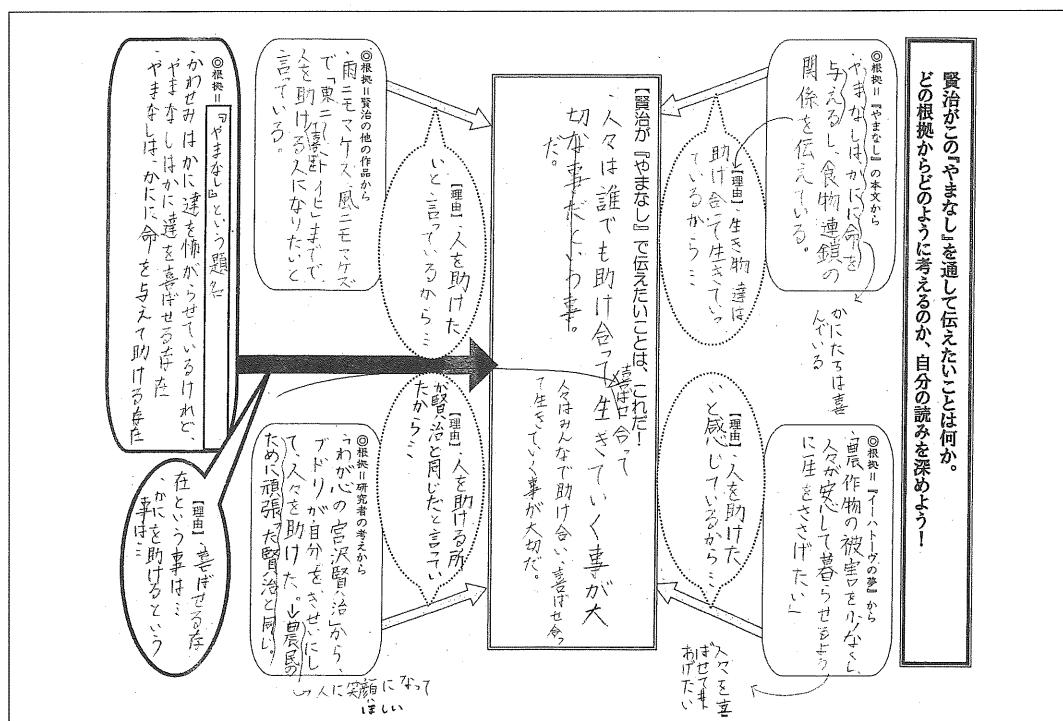
下に示すのが、そのワークシートである。

H児は、『やまなし』の本文、『イーハトーヴの夢』、『雨ニモ負ケズ』、屋比久貞雄の『わが心の宮沢賢治』の中の一節、さらに、「やまなし」という題名から、「人を助けたい」という願い」を共通項として見出し、「やまなし」の主題を「人々はみんなで助け合い喜ばせ合って生きていく事が大切だ」と結論付けている。

また、このワークシートは交流の場でも効果を上げた。授業の「まとめる段階」での二人の子どもの発言を示して、その証左とした。

**<I児>**…私は、賢治が『やまなし』で伝えたいことは、初めは、「周りにどう思われようが気にせずにありのままの自分をさらけ出してほしい。そして、動物も植物もみな平等に接することが大切だ。」と考えていた。話し合いをした後、「賢治は、そういう世界を築いてほしいと願っている。」ということを付け加えた。

**<J児>**…私は、初めは、「同じところからきたものでも、恐怖になるものもあり、恵みになるものもある。」が主題だと考えていたが、「恵みになることで平和になれるから、その恵みになってほしい。平和は、自然の恵みだ。」に深まった。



◆ 「やまなし」での工夫したワークシートを用いた読解（H児）

## (5) 小中合同研修会におけるノート・ワークシート指導の実践報告・協議

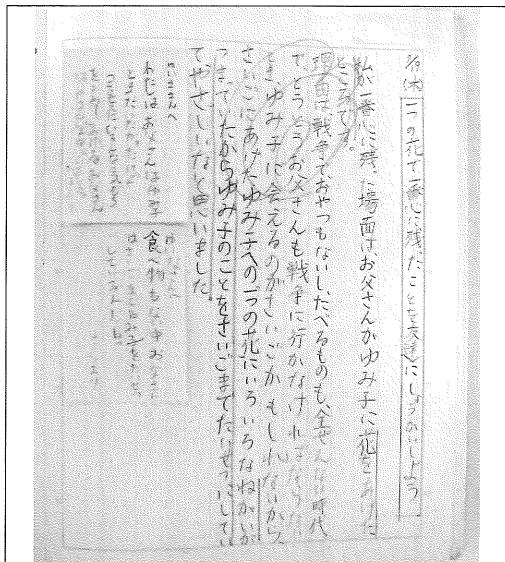
8月、本校が位置する東豊田中学校校区内のことども園、小学校、中学校の2園3校による合同研修会が行われた。本校区では、小中一貫教育の研究を推進しており、授業研究においても、次の「共通の手立て」を設定して日々の授業に臨んでいる。

### 【東豊田中学校区共通の手立て】

- ◎ 主題的に取り組める学習課題・学習問題を設定する。
- ◎ 授業での変容が見える工夫する。

この「共通の手立て」における「授業での変容が見える工夫」の一環として、合同研修会の国語部分散会でノート・ワークシート指導の実践報告・協議を実施した。

本校は、1年、4年、6年のそれぞれの学年がノートやワークシートを用いた4月からの実践を報告した。



◆ 付箋によって交流したノート例

その結果、ノート・ワークシートについて、次のことが確認された。

- ・ 個に応じた指導を可能にする形式のワークシートを開発していくことが必要である。
- ・ ノートやワークシート、原稿用紙を「交流の場」として用いることも効果的である。例えば作文指導において、読んだ子が自分の考えを付箋に書いて原稿用紙に貼り付けたり、相互批正させたりすることで、考えを交流させることが可能になる。また、この方法には、後から繰り返し見直して考えを深めることができるという利点もある。

## II 研究の成果と課題

### 1. 研究の成果

- (1) 学校全体での取り組みを通して子どもたちに次のような変容が見られた。
  - 班やグループでの話し合いに意欲的に取り組む姿が見られた。
  - 二人組やグループの中では、ホワイトボード等を用いながら伝える活動を楽しんだり、自分の考えを意欲的に伝えたりする姿が多く見られるようになった。
  - 少しづつ自分の考えを文や図で表現できるようになり、書くことへの抵抗感が減って、書き表す文章の量も増えた。
  - 高学年では、粘り強く、深く考えようとする姿勢が出てきた。比較して思考する力も伸びつつある。

### (2) 研究成果をまとめた「子どもの学び展」への出品から

一年間のノート・ワークシート指導や板書の工夫の成果をパネル展示という形式で静岡大学教育学部授業研究会主催「子どもの学び展」(平成31年2月26日～3月8日、

於：静岡県教育会館）において発表した。このパネルでまとめた内容を、本研究におけるノート・ワークシート指導、板書の工夫の成果として示したい。

- 低学年においては、項目を立てたり、文末の書き表し方をサポートしたりするワークシートを用いることで、読む活動が支援され促進する。
- 身に付けさせたい力を明確にしたノート指導やワークシートを活用することで、子ども自身が目的意識を明確にして取り組むことができ、学力も向上しやすくなる。
- 自他の考えを可視化し、その考え方の筋道を補助するワークシートを用いることで、子どもの読解が深まりやすくなる。
- その時、板書では短冊やカードを用いると効果的である。またワークシート等では、他者（友達や先哲）の考え方との比較がしやすかったり、他者の考え方を色鉛筆等で書き込む場を設定したりすることで、交流が深まりやすくなる。

## 2. 今後の課題

- (1) 今後、本校の子どもたちに育んでいきたいのは、次のことである。
  - ・ 「深める・広げる」段階においての一層の「深め合い」による読解の深化。
  - ・ その際に、全体の場で説得力のある主張をする意欲や力の向上。
  - ・ 上記二点も含めた子どもの意欲や学力の二極化傾向の解消
- (2) 上記の子どもの実態改善に努めるために、ノート・ワークシート、板書について次の研究を進める。
  - ・ 本研究によって明らかになった効果

的なノート・ワークシートを個に応じたものへと高めていく。

- ・ 「まとめる」段階におけるノート・ワークシート、板書の活用について研究を深め、リフレクションを通して汎用性のある読解力の向上を目指す。

### おわりに

「ワークシートは子どもを受け身にする」「考えを限定してしまう」という声を聞くことがある。ワークシートというツールが「悪い」のではなく、「悪いワークシート」もあれば、「よいワークシート」もあるのだと考える。

それは、板書やノートも全く同じで、単なる記録や子どもに視写させるためだけの板書、またその結果としてのノートからは、子どもの深い学びは生まれてこないだろう。そうした思いを原点にして取り組んできた今回の研究実践であった。子どもの読解力を高めるノート・ワークシート、板書の一層の工夫を続けていきたい。

(国語科主任：河野勝幸)

- i 「海外の補習授業校における手書き強化の国語学習－チェンナイでの実践をもとに－」[『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』第46号 杉崎哲子・末永和彦・入江茂雄 2015]
- ii 「小学校低学年における論理的思考力を育む国語学習の書字活動－ヤンゴン日本人学校での実践をもとに－」静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）第48号 杉崎哲子・萩野幹夫・伴野みづほ 2017
- iii 「三角ロジック」の教育の場での有効性は広く知られている。例えば、『論理的思考力・表現力を育てる言語活動のデザイン 小学校編』鶴田清司・河野順子編著 明治図書 2014。
- iv 「小学校における読解力を高める国語学習の『書く』活動－東豊田小学校での実践をもとに－」[『静岡大学教育学部研究報告 教科教育学篇』第50号 杉崎哲子・河野勝幸 2018] なお、この論文は、本研究の一環として研究授業2に基づいてまとめられているため、本報告の内容と一部重複する点のあることをお断りしておく。